

問題と目的

青年期は、他者との関わりの中で自己を見つめ、自己が何者であるのか、考えを深めていく時期である。従来、青年たちは深い友人関係を希求することによって両親からの心理的な分離を試みていると考えられてきた。しかし近年、青年たちの対人関係の様相が変化しているとの指摘がみられるようになってきた。山田(1989)は、現代の大学生世代の青年たちの友人関係の特徴として、「ふれあい恐怖」という症候群を報告している(岡田,2002)。ふれあい恐怖とは、顔見知りからより親密な関係に発展する場面(ふれあい場面)で困難を感じるという状態のことである。青年期の友人関係においてふれあい恐怖的心性を持つことは、友人関係において心理的ストレスを感じやすい、適切な自己開示を行いにくいなど、様々な問題点をもたらすということが明らかにされている。

友人関係のほかに異性関係もまた、青年にとって重要な関係であることが従来から述べられてきた。青年にとって異性関係、すなわち恋愛は、自らの成長に影響を及ぼす要因のひとつである。松井(1993)は、恋愛を人間的な成長の場であるとして、恋愛相手の考え方や性格を知ること、今まで知覚していなかった世界に目を向け、関係を貫くことによって積極性を身につけるなどの効果がみられるとしている。神菌ら(1996)は、恋愛は青年の精神的健康を維持するのにも有効な関係であるとし、また、Erikson(1959)は、恋愛は青年期における自己確立の機会であるとしている(高坂,2011a)。恋愛が青年にもたらす影響については様々な分野において研究され、その重要性が示唆されてきている。

このように、従来、青年期において恋愛は重要な対人関係であるとされ、青年自身も恋愛の重要さや恋愛が自身の成長に与える影響を自覚してきた(松井,1993)。しかし最近では、青年にとっての恋愛の位置づけや意味の変化が指摘されるようになった。高坂(2011b)やAERA(2009,2010)によると、現代青年にとって恋愛とは時にわずらわしいものであり、時に自己を脅かすものとなりうるため、恋愛に積極的な態度をもつことができずにいるという。こうした青年たちの背景にはふれあい恐怖的心性があることが予測される。青年の発達にとって、恋愛は重要な意味を持つにもかかわらず、最近の青年が異性関係に深入りできずにいることは問題ではないだろうか。そこで、本研究では、現代青年の異性関係におけるふれあい恐怖的心性について検討していく。

異性関係におけるふれあい恐怖的心性は、以下のような特徴をもつと考えられる。第一に、異性関係におけるふれあい恐怖的心性は、異性を意識した心性であるという点において、対人関係一般におけるふれあい恐怖とは異なるということである。第二に、岡田(2011)などより、友人関係においてふれあい恐怖的心性を持つ青年ほど自尊感情が低いとの見解が示されている。現代青年が恋愛関係をもつことを一種のステータスととらえていること、恋愛をする中で自分に自信をもつようになること(金政,2002)から、親密な異性関係におけるふれあい恐怖心性と自尊感情には何らかの関係があることが示唆される。第三に、現在の恋愛状況という文脈によってふれあい恐怖的心性の程度に差が出ることが予測される。すなわち両思い関係にある青年は、ふれあい恐怖的心性が比較的低く、片思いの青年たちはふれあい恐怖的心性が比較的高いという可能性が考えられる。最後に、ふれあい恐怖的心性が関係の深化に対しての困難さであることから、実際に交際をしている男女間においても、心理的距離が縮まらず、表面的な関係にとどまっていることが考えられる。松井(1990)は、恋愛行動を段階別に分け、第一段階における行動のひとつとして「内面の開示」をあげている。しかし情緒的な関係の深化を避ける傾向にあるふれあい恐怖的心性を持った青年においては、「内面の開示」が交際の初期段階に位置づけられない可能性が考えられる。

本研究の目的は、現代青年の異性関係におけるふれあい恐怖的心性の構成要素と特徴を明らかにすることである。そのため、次の3点について検討を行う。(1)異性関係におけるふれあい恐怖的心性の構成要素を明らかにする。(2)異性関係におけるふれあい恐怖的心性の性差を検討する。(3)異性関係におけるふれあい恐怖的心性と自尊感情、現在の交際状況および交際段階との関連を男女別に検討する。

方法

予備調査 愛知県内の国立大学学生2,4年生(M=42,F=51)を対象に自由記述式の質問紙調査を行い、現代青年が恋愛に対して実際に抱えているふれあい恐怖的心性について資料を収集した。この調査の回答と、岡田(2002)などを参考に、異性関係におけるふれあい恐怖的心性を問う項目を独自に作成した。その後、心理学専攻の大学院生2名、大学生1名によってKJ法によるカテゴリ分けを行い、異性関係におけるふれあい恐怖的心性55項目を作成した。その後、心理学教員1名と心理学専攻の大学院生4名、心理学専攻の大学生5名を対象に内容的妥当性の検討を行い、最終的に50項目を異性関係にお

けるふれあい恐怖的心性を問う項目として採用した。

本調査 調査対象者 愛知県内の国立、私立大学学生1~4年生360名(M=160, F=199, 不明=1)。

調査時期 2012年11月

質問紙構成 ①フェイスシート：年齢、性別を回答してもらった。

②交際状況を問う項目：現在の異性関係の状況を「両思い」、「片思い」、「なし」の中から回答してもらった。

③交際段階を問う項目：松井(1990)を参考に作成した交際の段階を問う項目に回答してもらった。②において、現在の異性関係の状況を「両思い」、「片思い」と回答した者を対象に、第一段階：「相手とは、日常的な会話をする程度の仲だ」、第二段階：「相手とは、お互いに悩みを打ち明けたり、肩などに軽いボディタッチをする程度の仲だ」、第三段階：「相手とは、デートをしたり、手をつなぐ、腕を組むなどの接触をする程度の仲だ」、第四段階：「相手とは、キスやハグをしたり、お互いの部屋を訪問する程度の仲だ」、第五段階：「相手とは、性交をしたり、結婚の話をしたりする程度の仲だ」のうちから回答を求めた。

④異性関係におけるふれあい恐怖的心性を問う項目：予備調査で作成した異性関係におけるふれあい恐怖を問う項目50項目を用いた。現在の異性関係の状況が「片思い」または「両思い」と回答した対象者には特定の相手を、現在の異性関係の状況が「なし」と回答した対象者には異性一般を想定してもらい、5件法で回答を求めた。

⑤自尊感情を問う項目：Rosenbergの自尊感情尺度を邦訳したもの(山本ら,1982)全10項目を用い、5件法で回答を求めた。

結果と考察

1. 異性関係におけるふれあい恐怖的心性の構成要素の検討

まず、異性関係におけるふれあい恐怖的心性尺度50項目について、基本統計量を算出し、平均値、標準偏差を検討したところ、2項目に天井効果、8項目に床効果がみられたが、現代青年の異性関係におけるふれあい恐怖的心性の特徴をより詳細にとらえる目的から、全項目を使用することとした。

次に、異性関係におけるふれあい恐怖的心性尺度全50項目に対して主因子法による因子分析を行った。初期の共通性が.25未満であった1項目を以降の分析から除外した。固有値の減衰状況や解釈可能性から、5因子構造が妥当であると判断した。そこで再度5因子を仮定して主因子法・Promax回転による因子分析を行い、複数の因子に高い負荷量を示す項目を削除したところ、最終的に2項目が排除され、48項目5因子構造を得た。第1因子は傷つくことを不安に感じ、自分が傷ついてしまいそうな行動を避け、異性との関係を上手く発展させることに困難を感じるという内容の項目が高い負荷量を示していたことから、『Fac.1 傷つきの予測と回避』因子($\alpha=.91$)と命名した。第2因子は、関係を築くことを重視せず、異性関係から退いてしまうという内容の項目が高い負荷量を示していたことから、『Fac.2 関係からの退却』因子($\alpha=.88$)と命名した。第3因子は、異性関係にのめりこむことで生じるデメリットを重視するという内容の項目が高い負荷量を示していたことから、『Fac.3 関係へのとらわれ』因子($\alpha=.87$)と命名した。第4因子は、異性関係に対してコスト、リスクなどを懸念するという内容の項目が高い負荷量を示していたことから、『Fac.4 コスト・リスク懸念』因子($\alpha=.62$)と命名した。第5因子は、異性関係を気軽なものとして捉えることで自己を防衛するという内容の項目が高い負荷量を示していたことから、『Fac.5 関係の軽視による防衛』因子($\alpha=.65$)と命名した。各因子の後の()はCronbachの α 係数を示す。

『Fac.1 傷つきの予測と回避』、『Fac.2 関係からの退却』は友人関係におけるふれあい恐怖的心性(岡田,2002)にみられる「関係調整不全」、「対人退却」に対応すると考えられる。項目の内容は異性関係に特有の心性ではなく、対人関係一般においてもみられる心性となっている。一方、異性関係におけるふれあい恐怖的心性では『Fac.3 関係へのとらわれ』、『Fac.4 コスト・リスク懸念』、『Fac.5 関係の軽視による防衛』という異性関係に特有な因子がみられた。これら3因子は、予備調査やAERA(2009)を参考に作成した項目から構成されている。すなわち、現代の青年たちが恋愛に対して抱く、「わずらわしい」「自己を脅かす」といった印象を強く反映した因子といえることができる。

2. 異性関係におけるふれあい恐怖的心性と性別との関連

異性関係におけるふれあい恐怖的心性の各下位尺度得点について、性別によるt検定を行った。その結果、『Fac.1 傷つきの予測と回避』と『Fac.3 関係へのとらわれ』について、男性より女性のほうが有意に高い得点を示していた(Table1)。女性は男性に比べて、どういった行動をとると自分が傷つくか、ということを予期しやすく、また、傷つきそのものに対しても敏感であることが伺える。

一方、『Fac.5 関係の軽視による防衛』下位尺度については、女性より男性のほうが有意に得点が高かった。男性は自分が異性関係にのめりこむことができないことへの言い訳として、「自分にとって異性関係は重要ではない、自ら異性関係を軽んじているのだ」と自身に言い聞かせていると推測される。

Table1 男女別の平均値と標準偏差およびt検定の結果

	男性		女性		t 値
	平均	SD	平均	SD	
傷つきの予測と回避	2.65	0.82	2.89	0.83	2.65*
関係からの退却	2.21	0.74	2.35	0.77	1.66
関係へのとらわれ	3.05	0.92	3.45	0.83	4.32**
コスト・リスク懸念	3.64	0.84	3.55	0.78	1.10
関係の軽視による防衛	2.23	0.79	2.02	0.68	2.74*

注1. 数値は尺度得点の平均値（標準偏差）

注2. F値 ** $p < .01$, * $p < .05$

以上のように、検討2では、異性関係におけるふれあい恐怖的心性に性差がみられることが明らかになったため、以下の分析では男女を別々にして、それぞれの特徴を精査していくこととする。

3A-a. 男性における自尊感情得点によるふれあい恐怖的心性の程度の差の検討

「あてはまらない」を1点、「あてはまる」を5点としてそれぞれ得点化し、自尊感情得点の平均値を算出した。その後、平均値±0.5SDを基準とし、対象者を自尊感情得点高群、中群、低群に分類した。その後、異性関係におけるふれあい恐怖的心性の各下位尺度得点について、自尊感情得点高中低群による分散分析を行った。その結果、『Fac.1 傷つきの予測と回避』下位尺度において、有意差がみられた($F_{(2,155)}=27.69, p<.001$)。低、中、高群間で有意な差がみられることから、自尊感情が高い群は、相手との関係を深めていくことに困難を感じにくいことが示唆された。

また、『Fac.4 コスト・リスク懸念』下位尺度においても有意差がみられた($F_{(2,153)}=3.58, p<.05$)。このことから、自尊感情が低いほど、恋愛にストレスやわずらわしさを感じやすく、悪い印象をもちやすいことが考えられる。

3A-b. 男性における現在の異性関係の状況によるふれあい恐怖的心性の程度の差の検討

異性関係におけるふれあい恐怖的心性の各下位尺度得点について、現在の異性関係の状況による分散分析を行ったところ、『Fac.1 傷つきの予測と回避』において、有意差がみられた($F_{(2,156)}=18.24, p<.001$)。「両思い」群の得点が「片思い」群、「なし」群よりも有意に低く、異性と結ばれている人ほど、相手との関係を深めるときに困難を感じにくいということが示唆される。これは、「片思い」群、「なし」群に比べて「両思い」群は、お互いへの信頼感が築かれているのではないかと考えられる。また、「片思い」群、「なし」群で得点が高いのは、相手からの返報が保証されないので、関係に不安を感じやすいのではないかと予測される。

また、『Fac.2 関係からの退却』においても有意差がみられた($F_{(2,154)}=14.14, p<.001$)。「なし」群の得点が「片思い」群、「両思い」群より有意に高かった。『Fac.2 関係からの退却』が異性関係を築くことから退いてしまう傾向を示す項目によって構成されていることから、特定の相手と関係をすでに築いている「片思い」、「両思い」群においては得点が低く、特定の相手との関係を持たない「なし」群において得点が高くなることは当然といえよう。

『Fac.5 関係の軽視による防衛』において「両思い」群と「なし」群の差が有意であった($F_{(2,157)}=3.70, p<.05$)。検討2の男性の特徴と同様、「なし」群の人は「自分に特定の異性関係がないのは、自分にとって恋愛はさほど重要なものではないからだ」と自分に言い聞かせているのではないかと予測される。

3A-c. 男性における交際段階によるふれあい恐怖的心性の程度の差の検討

交際段階ごとに対象者を5群に分類し、異性関係におけるふれあい恐怖的心性の各下位尺度得点について、現在の異性関係の状況による分散分析を行ったところ、『Fac.1 傷つきの予測と回避』において有意差がみられた($F_{(4,88)}=6.9, p<.001$)。交際の段階が進み、関係が深まった状態では、相手とのやり取りで傷つくことを恐れにくいですが、まだ、お互いの関係が浅い初期の段階では、傷つくことを恐れ、自分の内面を開示しにくいことを示すと予測される。

松井(1990)の作成した交際段階の発展によると、本研究の第二段階に当たる部分で、お互いに内面を開示を行うものとされているが、第一段階と第二段階において有意な差がなく、第四、第五段階において有意な差が見られたことから、現代青年においては、内面を開示がより後ろの段階でなされるものであるということが考えられる。すなわち、表面的な恋愛行動は先に進んでいたとしても、必ずしも心まで開いているとは限らないのである。

3B-a. 女性における自尊感情とふれあい恐怖的心性の程度の差の検討

異性関係におけるふれあい恐怖的心性の各下位尺度得点について、自尊感情得点高中低群による分散分析を行ったところ、『Fac.1 傷つきの予測と回避』において、有意差がみられた($F_{(2,193)}=13.60, p<.001$)。また、『Fac.4 コスト・リスク懸念』においても有意差がみられた($F_{(2,193)}=4.45, p<.05$)。この結果は検討3A-aと基本的には同じである。このことから、異性関係

におけるふれあい恐ろしい心性と自尊感情との関連については、男女間で同じような関連がみられるということが示唆されるが、男性に比べて女性は、有意差は出ているものの、群間の差が男性ほど激しくはない。

3B-b. 女性における現在の異性関係の状況とふれあい恐ろしい心性の程度の差の検討

異性関係におけるふれあい恐ろしい心性の各下位尺度得点について、現在の異性関係の状況による分散分析を行ったところ、『Fac.1 傷つきの予測と回避』、『Fac.2 関係からの退却』、『Fac.5 関係の軽視による防衛』において有意差がみられた(順に $F_{(2,194)}=15.49, p<.001$, $F_{(2,195)}=31.55, p<.001$, $F_{(2,195)}=4.12, p<.05$)。『Fac.1 傷つきの予測と回避』では3群間に有意差は見られるものの、その差はあまり激しくないことから、全体的に得点が高いところに分布しているものと考えられる。このことは検討2において、男性よりも女性のほうが得点が高かった点からみても、妥当である。『Fac.5 関係の軽視による防衛』では、男性の場合と異なる特徴がみられた。「片思い」群の得点が有意に高く、「片思い」群と「両思い」群の間に有意差がみられるのである。これは、思う人がありつつも報われない場合に、恋愛を軽視することによって、自分のダメージを減らそうとするためではないかと考えられる。全体を通して「なし」群の得点が高い中、「片思い」群の得点が高いことは大きな特徴であるといえよう。

3B-c. 女性における交際段階とふれあい恐ろしい心性の程度の差の検討

異性関係におけるふれあい恐ろしい心性の各下位尺度得点について、交際段階による分散分析を行ったところ、『Fac.1 傷つきの予測と回避』、『Fac.2 関係からの退却』において有意差がみられた(順に $F_{(4,102)}=3.70, p<.01$, $F_{(4,103)}=3.19, p<.05$)。『Fac.1 傷つきの予測と回避』では、検討3A-cと同じく、交際の段階が進み、互いの関係が深まった状態では、相手とのやり取りで傷つくことを恐れないということが示された。『Fac.2 関係からの退却』では、第一段階と第四段階の間に有意な差がみられた。しかし、全体的に得点が低いことから、片思いや両思いの人は、すでに相手との関係を築いているため、『Fac.2 関係からの退却』得点が低くなりやすいことが考えられる。いずれにおいても、第一段階と第四、第五段階との間で差が有意であったことから、現代青年においては、内面の開示がより後ろの段階でなされるものであるということが考えられる。

全体考察

本研究では、ある一定数の現代青年には異性関係に対するふれあい恐ろしい心性がみられることが明らかになった。また、異性関係におけるふれあい恐ろしい心性の構成要素には友人関係におけるふれあい恐ろしい心性(岡田,2002)と共通の構成要素に加え、友人関係におけるふれあい恐ろしい心性には指摘されない異性関係に特有の構成要素が見出された。また、異性関係におけるふれあい恐ろしい心性には性差があることも明らかになった。それらの構成要素が自尊感情や交際の状況・段階と関連をもつことから、青年にとって異性関係は重要な意味を有するといえる。

従来、親密な異性関係を築くことは、青年の精神的健康の上でも、心理的成長の上でも、重要であるということが言われてきた(松井,1993など)。しかし、本研究でもみられたように、現代の青年たちの中には異性関係に対し「ふれあい恐ろしい心性」を抱く青年もおり、異性関係を築き、継続していくことに必ずしも積極的ではない。異性関係から退却したり、関係の深化によって傷つくことを避けたりすることによって、一時的には気持ちの安定が得られるかもしれない。しかし、青年が真に精神的、心理的に健全な成長をしていくためには、異性関係に身を投じ、時に悩み、時に苦しみながら関係を深めていくことが必要であると考えられる。

引用文献

- 朝日新聞出版(2009)。「草食カレ」と結婚したい、朝日新聞ウィークリーAERA, 2009.7.6号, 29-33.
- 神薮紀幸・黒川正流・坂田桐子(1996). 青年の恋愛関係と自己概念及び精神的健康の関連, 広島大学総合科学部紀要IV理系編, **22**, 93-104.
- 金政祐司(2002). 恋愛イメージ尺度の作成とその検証—親密な異性関係, 成人の愛着スタイルとの関連から—, 対人社会心理学研究, **2**, 93-101.
- 高坂康雅(2011a). 大学生の恋愛関係の継続終了によるアイデンティティの変化, 日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集, **20**, 20.
- 高坂康雅(2011b). “恋人をほしいと思わない青年”の心理的特徴の検討, 青年心理学研究, **23**, 147-158.
- 松井豊(1990). 青年の恋愛行動の構造, 心理学評論, **33**, 355-370.
- 松井豊(1993). 恋ごろの科学, サイエンス社.
- 岡田努(2002). 現代大学生の「ふれあい恐ろしい心性」と友人関係の関連についての考察, 性格心理学研究, **10(2)**, 69-84.
- 岡田努(2011). 現代青年の友人関係と自尊感情の関連について, パーソナリティ研究, **20(1)**, 11-20.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子(1982). 認知された自己の諸側面の構造, 教育心理学研究, **30**, 64-68.